第一一七回　昭和六十年四月十日（水）

中嶋嶺雄氏講述

転換する中国を考える

富丘経済研究会

転換する中国を考える

東京外国語大学教授
中嶋嶺雄

きょうのテーマからするとタイミングがよろしいのですが、たまたま一昨日、深圳の経済特別区から帰ってまいりました。この春休みは香港、中国の深圳、マカオ、台湾と、今後の中国が対外開放政策を実行していく中での最も拠点とする地域を歩き、帰ってきたばかりです。私自身は中国にもしばしば行き、文化大革命の激動期にもおりましたが、専門家として見ていると、最近の中国は大きな変化を遂げています。深圳の経済特別区はその中でも最も進んだ開放経済体制の基地になっているという報道や意見が多いものだから、私自身がいささか不安になっていました。というのは、前回、深圳に行ったのは一年四ヵ月前ですが、この一年四ヵ月という短い歳月にもかかわらず中国の変化が大きいために、ひょっとすると私の従来の予想とは違って、深圳はすばらしい経済特別区に一変しているのではないかと一面では予想していたからでした。

しかし、私は従来から、そう簡単に現代化、近代化、工業化は実現できるものではないという考えを持っております。特に中国のようにこれまで、一方では中華思想に安住し、他方では余りにも政治にコストがかかり過ぎた社会では、政策が変わったからと言って、我々が考える意味での近代的な工業センターなり都市なりが一夜にしてできるとはとても考えられないという基本前提があります。それにもかかわらず、そうではない、大変進んで発展しているという意見が多いものだから、一抹の不安はありましたが、結論を申しますと、基本的には一年四ヵ月前とはほとんど変わっていませんでした。

深圳は、北京語ではシェンチェン、広東語ではサムチュンと発音しますが、香港にすぐ隣接する中国・広東省の一番南の国境地域にある経済特区、スペシャル・エコノミック・ゾーンで、中国の開放経済

体制の目玉商品、ショーウィンドーと言われています。今日の中国では、広東省のこの深圳、マカオのすぐ北の珠海、刺繍で名高い汕頭、それから福建省に行って台湾の対岸になる厦門が、四つの経済特別区と言われております。中でも深圳が一番進んでいるというのが最近の新聞その他に出ている論調ですが、私が見てきた限りでは、ここが経済特別区として我々が考えるような工業センターになるにはまだまだ時間がかかるという感想を持ちました。

この深圳には、香港から前の日に申し込めば日帰りのツアーでも行けます。あるいは香港・クインズロードの中国旅行社で申請をすると、一般旅券でも五日間のビザが取れるので、わりあい自由に行けるようになっています。深圳はそれほど自由に、特に日本人には開放しはじめているので、自信のある方は御自分で手続きされて行ってごらんになるといいと思います。深圳経済特区の中心から四十数キロの西側に蛇口という輸出加工区ができていますが、私はここにも行ってみました。ここは三洋電機がテレビとラジオの工場をつくって注目されています。その工場のすぐ近くにはシーワールドというのでしょうか、横浜港の氷川丸のように船が置いてあって、中国の人たちが遊覧したり、遊べるようになっており、あの辺は海産物もあるので、それなりの公園のようになっております。それから深圳で目立つのは、あちこちに遊園地があって観覧車が見えたりすることです。

ビルもかなり林立しているのですが、私がどうして経済の近代化がそう簡単ではないかというと、要するに、ここでは建物が建っているだけなのです。建物の周りの表の舗装、下水設備など広い意味でのインフラストラクチャーは、全く二の次、三の次になっている。また建物の中に入っても、建ったばか

りだというのに水道が出ないといったような状況もあります。しかも深圳の経済が必ずしも順調にいっていないという見方もかなりあって、日本の企業も駐在事務所を出しはじめているが、これも将来のおつき合いという意味で出しているというのが現状だと言っていいと思います。

深圳の町の中のいわば中国人の町もほっつき歩いてみたのですが、非常に対照的なことは町の表に建っているビルと従来の中国人社会とのコントラストが余りにも大きいということです。ビルだけはかなり大きいものが建っているが、一般中国人の例えば市場、住宅との差は想像を絶するものがあった。今の中国の近代化が持っている矛盾を照らし出しているような一つの絵になっています。依然としてごみの処理などもほとんどできていない、その意味では本当に汚くて後れている。こういうことを言うのはいけないのかもしれないが、実際にはそういう状況です。外国に行ったら市場に行くとその社会がかなりわかるもので、私も行って見ましたが、広東人のことですから、肉などもブタの脚とか頭とかを含め、棚ざらしにしているので、ほこりがかかる。そういう状況と、そこから見える中国の新しいモデルとしてのビルの遠景は、コントラストとしてはおもしろいのですが、それがやはり中国社会の現実だと思いました。中国で最も進んでいる、中国の西側へのショーウィンドーである深圳の経済特別区が香港と同じようになるのは、すべて順調にいっても二十一世紀まで待たなければならないだろうと思いました。

香港は一九九七年に中国に返ることになったが、その後の香港が果たして順調に推移するかどうかは、私もかなり疑問があります。しかし、英中間の返還合意が成り立ってからは、香港の経済的な安定が再び甦ってきたような気もします。特に最近は日本の企業も進出し、「そごう」や「八百半」のようなデ

パート、スーパーマーケットなども新たに資本を投下しているし、大成建設も幾つかビルを建てている。それからアメリカの企業もかなり出てきております。その香港は、一人当たりＧＮＰが既に五千ドルを超えています。今、日本は一人当たりＧＮＰが一万ドル近くなっているから、その半分ぐらいにはきているわけです。中国大陸の方は一般には二百五十ドル、多くても三百五十ドルと言われていますが、それと香港の差というものが、やはり深圳にも反映しております。近代的なビルに関してはまさに香港的なものを深圳につくっているのですが、一般の中国社会の底辺部門における生活実態は、二百五十ドル、三百五十ドルの国民所得であり、その違いが先ほど申し上げたようなところに出てきていると思うのです。

私どもは中国について考えるときに、とかくほかの国とは違って、いろいろの体験を持っている。それぞれのイメージはかなり具体的だろうと思います。ご自身の大陸での体験に基づいた中国イメージもあろうし、新聞、雑誌、あるいは中国人との接触によるイメージがある。どこに物差しをあてるかによって、中国像はいろいろに描かれます。ある人は、中国は大変発展していると言う。戦前や開放前に比べれば発展しているのは当然で、発展がなければうそであって、中国以外の世界はもっと発展しております。日本は一九六〇年と比べただけでも、一人当たり国民所得が四十数倍に成長している。一方、台湾も、中国革命に敗北したとは言え、発展は中国大陸よりもはるかに大きい。どこにメジャーをあてるかによっていろいろに中国像が描かれるが、その場合、ときどき錯覚に陥ることがあります。

私たちは、中国に行くと、ほかの国とは違ったものを心情的に訴えられる。エモーショナルな共感を

覚えます。万里の長城に行くと、日本人はやはりあの悠久の歴史を思って胸がジーンとなります。シルクロードから遠く西を望めば、いろいろなロマンが甦ってきます。日本人は、そのことと現在の中国社会とを知らず知らずのうちに重ね合わせ、そういうロマンや心情の中で中国を見てしまう場合が多いのではないでしょうか。が、考えてみると、万里の長城は秦の始皇帝の時代、あるいはそれ以前に建てられたという説があるぐらい、いわば紀元前の歴史的遺産、遺物だから、現在の中国社会とは実際には関係がない。それにもかかわらず、そこに重ね合わせてしまうようなところに、日本人の中国認識の、ある意味での弱点――長所かもしれないが――そういう弱点があるので、やはり客観的な数字なり常識なりで中国をお考えになった方がよろしいかと思います。私などはそんなふうに中国を見ていて、いささか手前みそになりますが、予測が当たる、見通しがきくと言われるのですが、それはごく常識的に考えるからです。余りとらわれない方がいいと思っております。

ところが日本人は、文化大革命にしても、最近の開放経済体制に対する中国フィーバーにしても、ある意味では常識を超えた見方をする。国際的なセンスに富んでいる日本のリーダーたちは、ほかの国に対しては常識で考えるのに、どうして中国に対しては常識で考えられなくなるのかということを、私などは感じます。例えば、今の中国は開放経済体制と言っているが、いかに開放とは言え、その目標である「四つの現代化」――工業、農業、国防、科学技術の現代化――を数字であらわすと、今世紀末に一人当たりの国民所得を千ドルにしたいということで、これがすべての目標です。今、日本は既に一万ドルになんなんとしている。台湾は最近、三千ドルを超えたし、韓国も間もなく三千ドルになります。ア

ジアのニューリー・インダストリアライジング・カントリーズ、いわゆるアジアニックス（ＮＩＣＳ）と言われる、他の儒教文化圏の国は、シンガポールも香港も既に五千ドルを超えております。それなのに中国は、今世紀末までに千ドルにしたいということです。今世紀末まであと十五年あり、かなり長い期間だと思いますが、すべての政治、社会、経済がうまくいったと仮定して、そのときにようやく千ドルになる。こういうことを考えると、中国の経済が本当はどのレベルのものか、どの程度のものかがわかると思います。

最近、中国の指導者は、開放経済体制がうまくいっていると言って強気になっています。しかし、いかに強気になっても、この数字自体は修正していません。北京、上海などの都市や深圳では一人当たり国民所得は平均より高く、千ドルに達する部分も出てきていると言われるが、十億になんなんとする人口を持っているので、平均的に見るとまだまだ二百五十ドルないしは三百五十ドルです。そこに中国のイメージが具体化されて出てきます。いかに中国の経済が上向いているとは言え、余りにも後発経済国家だと言わざるを得ないという、かなりコンクリートな結論が出てくると思います。

一つの社会が成熟してほぼ政治的安定を遂げるということ、つまり指導者がだれになっても、その国の社会的な方向がほとんど変わることがないという成熟段階に達するには、一人当たりＧＮＰが二千ドルにならなければ無理です。これは我々のような政治学や国際関係論の立場から見ている者が、カントリーリスクを図る非常に常識的なメジャーです。その意味で台湾を見ていると、蒋経国以後いろいろな問題があっても、もう急激にひっくり返ることはないと思う。例外はあっても二千ドルのラインを超え

ると、その社会はかなり成熟してきます。韓国も二千ドルになるまでが大変だったが、そのあとは成熟した方向が出てきているし、国民の貯蓄性向が急激に高まり、個人の経済運営の観念が高まってきます。

中国は一体、いつになったら一人当たりＧＮＰが二千ドルになるか。今世紀末に千ドルを目指している中国が、中国全体として二千ドルになるのは、二十一世紀もかなり先のことだろうと思います。そうすると、それまでは政治的変動、社会的変動があり得るという理論的な蓋然性を考えておいた方がいい。これまで余りにも政治的に揺れ動いてきた国であるし、最近は鄧小平氏に、余りにも権力が集中しすぎています。ということは、鄧小平以後への不安を誘うと考えるのが常識でしょう。鄧小平という人は、言ってみれば党官僚、まさにビューロークラートであり、ロシア語で言うアパラーチキです。最近の言葉で言うと、ノーメンクラツーラーの象徴のような人で、なかなかしたたかな党官僚であり、オルガナイザーである。明らかに毛沢東のようなカリスマ的なリーダーとは違ったタイプです。

ところで中国社会というのは、それが中国のポリティカル・カルチュアですが、集団指導が絶対になじまない国です。私は、中国について書くもので、中国の政治的リーダーシップに関して「集団指導」という言葉を使ったことがありません。ところが日本の新聞は、指導者がかわると、これからは集団指導だと書く。毛沢東が亡くなったときも、鄧小平、華国鋒の集団指導だと書いたが、それがなかなかできない。そういうかたちのものは、恐らく中国の政治文化になじまないのだと思います。中国が集団指導になるには、一人当たりＧＮＰが二千ドルか三千ドルぐらいになり、底辺に至るまで開かれた社会になってからでないと無理でしょう。最近の中国を見ていると、党官僚として、かつて毛沢東のカリスマ

的個人独裁を批判していた鄧小平が、非常にワンマンになってきております。

鄧小平という人の個性を一口に言うと、時間というものを政治に取り入れることができた人物ということになるだろうと思います。これは恐らく今も、彼は考えていると思う。どういうことかというと、毛沢東の場合は、彼自身が永遠だった。毛沢東のやろうとしたことは、うまく表現すれば〝貧困のユートピア〟と言いましょうか、貧しさの中に人間性がもっと清廉、潔癖である一つのコンミューンをつくっていくのだと、善意に解釈すれば言えます。しかし、これは霞を食うようなものです。中国人社会というのは、マックス・ウェーバーも言っているように、欲望と禁欲がメダルの表裏のようになる社会です。彼らは禁欲することができるが、それは決して本来の中国民族の姿ではない。非常に勘定高いし、金銭感覚にさとい。これは中国人のいい意味での特徴でもあって、日本人とは大変に違う。華僑社会のネットワークをごらんになれば、これはすぐにおわかりいただけると思います。

こういう状況の中では、〝貧困のユートピア〟は無理だった。だから毛沢東の四半世紀の政治は、中国社会に何も根づかなかった。その毛沢東は、それにもかかわらず、晩年は彼自身が永遠になってしまった。本当は、大躍進政策の前ぐらいのところで引退していればよかったと思うのです。大躍進政策に敗北して一たんは劉少奇に譲ったのだから、あそこで引退していればあんな悲劇にはならなかったでしょう。ところが彼は、非常に個性的なリーダーでありながら、自分自身が永遠になってしまった。時間感覚がなかったわけです。

鄧少平の金言は「機不可失、時不再来」で、その意味は、時は再び来ないからチャンスというものは

絶対につかまなければいけない、ということです。鄧小平は、自分はこれで生きているのだと、内輪の仲間に話しており、その内部文献を私は見たことがあります。いかにも鄧小平らしい言葉です。彼が一九七七年、奇蹟的なカンバックをしたときに、自分はあと八年から十年、体は大丈夫だと言いました。鄧小平氏がそのような時間というものに触れることは、非常に意味がある。つまり「チャンス」と「時間」を考えなければいけないということです。彼は、いつも時間を考えている。毛沢東は時間を考えなかった。鄧小平氏が言った「あと八年から十年」というのは、一九八五年から一九八七年に当たるが、中国は今まさに、鄧小平体制の最後の賭けに出ております。

というのは、あと八年から十年の間にこの社会を徹底的にアンチ毛沢東のものにするぞという、彼の闘争宣言でもあったと思うのです。しかも、それを八年から十年でやるんだというのですが、まさにそのとおり、鄧小平氏は一歩一歩、毛沢東型の社会を崩してきました。今の中国にとって必要なことは、毛沢東モデルなら何でも壊すことです。鄧小平氏は八十歳ですが、自分の命のあるうちに非毛沢東化をなし遂げなければならない。そのためには、中国と言えば毛沢東思想、毛沢東思想と言えば人民公社と言われた、あの人民公社を壊さなければならない。その人民公社の解体を八〇年に入ってからやり始めました。農村社会だから、毛沢東モデルの農村の集団化を壊してしまわなければならない。今まで余りにも毛沢東モデルが強く存在しすぎていたので、それを壊すためには少しぐらいどうなってもいい。放（ファン）だから少しぐらい何をやってもいい。収（ショウ）という引き締めでなく、何でもぶち壊せと言ってやっています。それがここ数年間の中国の経済活性化政策を、政治のレベルから見た状況だと

言っていいでしょう。

これまで中国社会は、放と収が非常にきれいなオシュレーション、政治的循環をなしており、五、六年で変わってきております。最近の開放経済体制は少し行きすぎており、ひずみがある。一人当たり国民所得が二百五十ドルであり、平均収入は月六十元ぐらいです。一元を百円と換算しても、月六千円ぐらいのものにすぎない。私は深圳で女性のドライバーを雇ったときに、深圳はほかのところよりも給料が五倍もいいはずだといろいろと確かめてみました。その女性ドライバーは、自分はそうじゃない、一ヵ月で三十六元だと言っていました。だが、蛇口まで行ってもどってくるのに香港ドルで三百元を要求してきた。これは明らかに不当に取っているなと思ったが、日本円にすれば大したことはないのでそのまま渡しました。つまりそういうかたちで、非常にひずみがあります。だから、彼らが日本のテレビを買うというのはどういうことかと言うと、貧民窟に住んでいながらベンツに乗るようなものです。これを中国社会全体に強いることは、中国のステディな発展にとって果たしていいだろうかという問題であるわけです。中国人自身もそのことに気がつき始め、最近、五島昇さんと会われた姚依林というなかなかしたたかな経済担当の副首相も、そろそろ引き締めをしようと言っております。

来年から始まる第七次五ヵ年計画で、過去一、二年のような一四%近い経済成長を続けることは、とても無理だと思います。今までが余りにも低かったので、ちょっと経済の政策を変えれば晨村が活性化するのは当然で、後発経済国はみんなそういうパターンをとっています。だが、そのままずっと続けるのは無理なことです。最近の中国は、経済開放体制が進んで外国のものが入ってきて急激に消費性向が

高まり、一生懸命にテレビを買おうとする。二百五十ドル、一ヵ月六十元ぐらいの収入であっても家族みんなで働くから、二年ぐらい頑張ればテレビが買えます。あるいは工夫して裏経済をうまく運営すれば、買えるということがある。しかしそうなったら、果たして中国のこれからの建設はうまくいくだろうかという問題があります。そのときに、日本人が中国社会の経済発展を阻害した、あるいは再び日本帝国主義、日本の独占資本が中国を侵略したということになりはしないか。その可能性も考えておかなければいけないと思っております。

ついこの間は、教科書問題であれほど日本をやっつけました。宝山製鉄所にしても、私はたまたまテレビで稲山さんと一緒になったときに事実を申し上げたのですが、稲山さんは、学者さんはそう見るが私ども大丈夫だと思うとおっしゃった。が、いまだに一かたまりの鉄も生産されておりません。私がそのとき、なぜそう簡単ではないと感じたかというと、内部文献のみならず、公開資料である人民日報で、ある記録を読んでいたからです。宝山製鉄所の尋問会という特別委員会で、なぜあんなものを持ってきたのか、コンピュータ化されたあんな設備は、労働力がいっぱい余っている中国社会の矛盾を拡大するだけじゃないかとか、なぜ中国の現代化の根幹である鉄鋼業を日本独占資本に再び握らせるのかとか、内部からさんざん批判が出ていました。

先ほどの話にもどりますが、あれほど時間感覚を政治に入れている鄧小平氏が、このところ余りにもワンマンで、急ぎすぎている気がします。この間の国慶節をテレビで見ていて異常だなと思ったのは、とにかく鄧小平氏オンパレードだということでした。彼の正式なポジションは、党中央顧問委員会主任

で、言ってみれば福田赳夫さんのような立場の人です。それが全部やった。人民開放軍の閲兵の場合は、彼は国家と党の二つの軍事委員会の主席だから不自然ではない。それにしてもなぜ鄧小平氏が今、国家と党の二つの主席を兼ねなければならないのか。これはやはり、そこまでやらないと不安があるからでしょう。階級制の導入にしても、もう一、二年前から再びそうすると言っておきながら、依然として実現できておりません。

鄧小平氏は建国三十五周年の国慶節をすべて演出した上、記念演説までやっております。国慶節は中国共産党の行事ではなく、中華人民共和国としての国家の行事です。国家主席に李先念さんを据えているのだし、しかもこの李先念さんは、かつての劉少奇氏のように軍の統帥権を持つような国家主席ではない。インドの大統領と同じように、まさにご祝儀用の国家主席です。だとすれば、あのときは李先念さんが記念演説をするなり、開会の挨拶なりをしなければいけなかった。けれども、すべて鄧小平氏がやってしまった。そして鄧小平氏が壇上に昇っていくときに、あとの人たちはある距離を置いて集団で昇っていきました。これなどは、そこには微妙な問題が含まれているような気がいたします。

だからと言って、鄧小平氏が亡くなった後、すぐに中国社会がひっくり返るということではないし、毛沢東型の社会にもどるということでもない。これは断言していいと思います。その点で中国はポイント・オブ・ノーリターン、もう後には戻れない地点を越えた。もう一遍、〝貧困のユートピア〟で階級闘争というわけにはいかない。それはそうなのですが、今のようなかたちで西側から技術や資本を入れて開放経済をやり、拡大性向の路線を突っ走っていくのか、もっと縮小均衡型の計画経済をベースにし

た、よりステディな路線にいくべきか。「放」でいくのか「収」でいくのか。これについてもう一遍、あるいは二度、三度と論戦があり、政策が揺れざるを得ないと思います。

これまで中国を見てきた者の考え方からすれば、これほど鄧小平ワンマン体制であるにもかかわらず、今の開放経済体制に対する批判がかなり濃厚にちらついているということが言えます。例えば陳雲政治局常務委員の立場です。陳雲さんという人は、今もし中国共産党で自由な選挙があったとしたら、鄧小平氏よりも票を取るのではないかと思われるくらい、人望の厚い、なかなかすぐれた指導者です。彼の人望が厚いのは、五〇年代から毛沢東の人民公社政策に一貫して批判してきたということがあります。鄧小平さんが人民公社や毛沢東を批判したのは、文革の前の六〇年代の経済調整期以後です。劉少奇、鄧小平はかつては一緒にやっていたが、その前から陳雲さんは集団化のための毛沢東型モデルにたてついていた。そのため彼はずっと冷飯を食わされていました。それだけに、逆に今の時代では信頼が高いわけです。陳雲さん、あるいはその下にある姚依林さんのような人たちは、明らかに今の開放経済体制のアンチテーゼを形成しています。ほかに何人か名前を挙げることもできます。中国共産党の胡喬木、薄一波という人たちもいる。これらの人たちは陳雲経済思想というものを、非常に高く評価しております。一九八一年のプラントキャンセルのとき、そんなに日本からプラントを買ってどうなるかという陳雲氏の党中央工作会議のツルの一声で、中国がプラントをキャンセルをした。皆さん方の中にもその被害を受けた方がおられるかもしれませんが、それほどしたたかな人です。

この陳雲氏の考えていることは、やはりベースは社会主義でいかないといけない。こんなことをして

いたら、国の存立の基盤である社会主義そのものが中から崩壊してしまう。つまり鳥籠経済論です。鳥籠の枠組をきちんとしておかないと、まるまると肥った鳥が逃げてしまう、というのが陳雲氏の考え方です。私はこの縮小均衡型の計画経済を、よりオーソドックスな社会主義経済路線と見るのですが、陳雲さんの影響は非常に強いし、そういう立場からの批判が出ております。それほどまでに今の中国の開放経済体制は、ひずみがある。テレビが売れるのは結構ですが、一方では一人当たりの国民所得がさっき言ったような状況です。そういう状況の中で、拝金主義の傾向や、あるいは汚職、腐敗、堕落現象が見られる。それに対して錦の御旗を掲げ、社会主義とは何であるか、革命はどこに行ったのかという言い方が出てくる可能性は、どうしても出てくると思うのです。

しかもこういう路線は、ともに非毛沢東化、毛沢東を否定して「四つの現代化」でいこうというコンセンサスの上に立った、中国の行く末についての二つの考え方ですから、今の批判派の方も十分、説得性を持ち得るわけです。中国はもう後ろにもどることはない、ポイント・オブ・ノーリターンなのですが、今後の行く道をめぐって、今のようなかたちでいくべきか、そうでなくもっと押えていくべきかという議論は、当然、起こると考えていいと思います。鄧小平は余りにもワンマン体制であるし、非常にやりすぎているので、かなり敵も多い。文化大革命の際の、もう一遍、復活した「走資派」批判のときの鄧小平に対する批判をごらんになればわかるように、彼は外国から物や資金を入れたり、外国のノウハウや技術を獲得すればそれで中国がうまくいくと言った、これこそブルジョワ買辦思想だという批判が盛んに出ました。これこそ資本主義の道を歩む実権派、キャピタリスト・ローダーズだと言われた。

こういう批判がまた出てくる可能性は十分にあるわけだから、それに耐えて、果たして後継者の胡耀邦総書記で中国がやっていけるかどうかと考えると、まだまだそこには不安があると思わざるを得ません。

このように今の中国をごく常識的に見る方がよろしいと思うのですが、ここで農業の面を私なりに見てみたいと思います。最近は農業が非常によくなっているという意見があるが、これは今までが余りにも悪すぎたからです。私はかつて人民公社へ案内されて解放中国の農村へ何度か行ったことがあります。私自身、言葉が通ずるので、農民と話をします。農民は何かを訴えたいように、いっぱい寄ってきてくれる。だが、人民公社の管理委員会の我々を案内する人たちがそれをめざとく見つけて、まるで動物でも追い払うように、シッ、シッと彼らを私から遠ざけてしまう。また私は文革のときも、よれよれの服を着て上海などの近郊をほっつき歩いたこともありました。農民たちと会話してみると、いかに人民公社というものがひどいものかということがわかった。農民たちを追い払う人民公社の幹部は旧中国の土豪劣紳、租税取立人と変わらないと、一般の中国の農民は考えていた。ところが日本では、人民公社によって中国の農村がすっかりよくなり、経済も躍進したことになっていて、これが中学や高校の教科書にも書いてあった。が、とんでもないことであったわけです。

人民公社の管理委員会は、いかに働けども働けども農民のところにくる。彼らは土で手を汚さないから、ノーメンクラツーラー、つまり帳簿をつける人たち、特権階級です。これに対する一般農民の敵意や批判は非常に大きかった。その人民公社を解体して、あなた方が主人公であっていいんだよという今の生産責任制をとったのだから、農民にとっては、待ちに待っていたということです。パールバックの

「大地」をお読みになるとわかるように、土地を持つということは、長い間の中国民衆の待望でした。中国共産党自身、中国革命に参列して中国国民党を打倒すればあなた方は土地が持てるのだと言って、農民を引きつけてきた。孫文の国民革命も「耕す者が土地を持つ」がスローガンだったし、太平天国の革命もキリスト教的な平等主義を掲げ、天朝田畝制度を掲げた。古来、中国の農民一揆を見てもわかるように、土地というものが彼らにとっては母であった。それを土地改革によって農民に与えておきながら、毛沢東は、互助組から始まって、初級合作社、高級合作社と集団化していき、人民公社にしてしまったのだから、言ってみれば農民を裏切ったことになります。

李四喜という農民党員は、かつて共産党幹部は中国共産党員になって革命に参加すれば土地が持てると言っていた、土地改革で土地を手に入れた、そして今度は集団化するという、これは一体どういうことか、この上、革命をして何をするのか、革命というのは土地を持つことだったじゃないかと、共産党の幹部に食ってかかったことがありました。当時は、この李のような意識こそブルジョワ思想だ、こういうものをやっつけなければいけないという批判が起こって、集団化までもっていった。言ってみれば、今の中国はそれを個人のところにもどしているのに等しい。だからこそ、朝から自分で丹精をこめて作物をつくる。農業が上向いてくるのは当然です。しかし、それで農業生産がいつまでも上昇することになるかどうか。私は農業の専門家ではないが、常識的に見ても、農業生産の上昇率は四、五%がせいぜいだろうと思います。

中国の農業生産が高まったとは言っても、今までが余りにも低すぎたからです。どのぐらい低かった

か。常識でお考えになればわかると思いますが、大ざっぱに言うと、今の中国は十億人に食わせることができるようになったということです。これは大きな評価を与えてもいい。けれども、今の普通の国はどこでも自分の国民に食わせることができます。かつてのような飢えがなくなったと、中国をそこまで低く見れば確かに大きな進歩かもしれない。だが、どこの国でも、アフリカ以外はちゃんと食わせることができるようになっています。初めから中国文化、中国民族に高い評価を与えていると、毛沢東があれほど社会主義、農村経済、人民公社をやったにもかかわらず、どうしてこんなに農業生産が伸びなかったのかということになります。中国は十億の人口のうち八〇%の八億が農業人口です。つまり八億人が畑で働いて、十億人を食べさせている。この基本構造は今でも変わっていません。八人が働いて、十人しか食わせることができないのです。

最近、中国は穀物を輸出しているというのですが、これは姚依林氏も否定しています。とんでもない、まだそこまでいかないんだと言っている。それは、そうだと思います。一部、戦略的に輸出したり、一種の飢餓輸出をしているが、この間の黄河の洪水のときにも国連からも緊急食糧援助を受けています。それから毎年、オーストラリア、カナダから小麦を買っている。ということは、現在、八億の農業人口がいて、十億をようやく食わせることができるようになったというのが、よりリアルな中国農村社会のイメージです。これは余りにも生産性が低い。アメリカの場合、農民は五百万人しかいない。日本も、本当の農民というのは非常に少なくなった。しかし、日本は米が余っています。アメリカの場合は、五百万人の農民が二億人のアメリカ人にあり余るほど食糧を供給し、そのほかに余剰農産物として外に出

しています。中国の農村が本当に近代化すれば、二千五百万人の農民で十億人を食わせられなければいけない。ところが、八億人いても十億人に食わせることができるかどうか。そういうギャップがある。これはさっきの深圳と香港のギャップと同じように、非常に大きいギャップだと思います。

そのような状況だから、少し農民にやる気を起こさせれば生産が上昇するのは当然であって、しかもこれは言ってみれば、一種の〝花見酒の経済〟です。今まで引き締めていたのをワーッと緩めるのだから、みんな浮かれている。浮かれた農民が万元戸だ何だと言ってそっちに走って、テレビだ、外国旅行だと言い出す。中国社会の基がそんな状況だから、大変片ちんばなかたちで、逆に中国の近代化を阻害することになりはしないかという気がします。西側のものを導入するとは言え、中国の指導者は余りにも安直に資本主義社会というものを考えている。しかも腹の底では資本主義に敬意を払っているとは思えない。やはり社会主義の方がいいのだということです。日本に対してもなかなか複雑で、日中関係は異母兄弟だと思うのです。アメリカ人からはお金を借りてもいいが、日本人からは借りたくないという気持ちは、誇り高き中国民族の心の中に深くあると思います。

この間も深圳から帰ってくるときに電車の中で、同行の人の席をとっておいたら、そこに若い香港中国人が割り込んできてその席に座ってしまった。それだけならまだしも、座っておいてベラベラッと文句を言っている。盗人たけだけしいもいいところなので、他人の席を侵略しておいてそんなことを言うのは何だと、私も中国語で言いました。そうしたら、すぐ横にいた五十歳前後の中国人が彼に荷担して、侵略と言えば日本軍国主義は我々を侵略したとか言うものだから、私は、それとこれと問題が違うでは

ないか、何を言うかと言って随分やり合ってしまいました。中国人は日本人に対していろいろな感情を持っている異母兄弟だと思うのです。異母兄弟の間というのは、うまくいっているときはいいが、一度それが金銭問題や貸し借りの問題でこじれると、他人よりほぐしにくいかたちになる。

日本人と中国人は、民族的にも文化的にも同じルーツです。しかしながら、日本人は奈良、平安時代に中国の文化を取り入れて以来、今日まで日本的なものをつくってきた。そこには大きな違いがあります。例えば日本も中国も同じように箸を使うが、中国人は象牙の箸、金銀の箸を使い、何回も同じ箸を使う。我々は箸を使い捨てにする。一期一会を大事にする日本文化の、あの木の香りが、中国の人たちには絶対にわからない。お寺の構造も、五重の塔の木造建築は日本的な美です。武士道にしても、中国の封建社会は周の時代で終わっているが、我々は長い間の封建武士社会、幕藩体制があった。その成果の上に今日の日本社会があるわけです。中国の侍というものを聞いたことがあるでしょうか。これは周の時代に終っている。その後は家産官僚制で、皇帝があって、そこに宦官、読書人がいて、そして広範な農民がいるという家産官僚国家になった。その点でも大きく違うわけで、日中は異母兄弟であるわけです。だから三島由紀夫の美学とか、葉隠、武士道などは、中国人には理解してもらえない。アメリカ人はむしろ異質の文化として理解します。それほど日中関係は違っています。

もっと具体的に言えば、日本には武士階級の文化があるから、主人と召使が同じお膳で食べるということはしない。中国は一度、家長の権限を認めると、あとは平等です。家産官僚制は同時に一種の均霑思想、平等思想です。だから、主人も召使もみんな長い箸で同じ鍋からお皿にとって食べる。しかし、

家長の権限は絶対です。毛沢東のようなカリスマ的な支配がある。そういう文化の構造をとっているから、近代的な政治の仕組みはなじみにくい。中国社会と日本社会がこんなに経済的な違いがあること自体、本来的な摩擦を含んでいるということになります。そのうえ、何だ日本人はこんなに成長した、敗戦国がこんなに成長したという複雑な感情が屈折しているということを、ぜひお忘れいただかないでほしいと思います。その上で、中国に協力できることは協力する。協力はいいのですが、日本人の悪いくせで、非常に卑屈な協力の仕方をしてしまう。中国については、常識的に考えるべきところを常識的に考えない。ロマンの中で中国を考えてしまう。そういうところがありはしないでしょうか。

先ほどの問題にもどると、そういう農業社会だから、近代化が五年や十年でできるはずがない。やはり一世紀の課題だろうと思います。しかも、中国はついこの間まで毛沢東思想、階級闘争を掲げていた。華国鋒氏は大平政権のとき二回日本に来て、大平さんの葬儀のときが最後ですが、私は武道館でその後ろ姿を見ていて、この人は国に帰れば消えていく人だなと思いました。今、華国鋒氏は一体どこにいるのか。北京の日本大使館でさえ動静がつかめない。そういう政治社会です。華国鋒氏を失墜させてから、まだ二年半にしかすぎない。今はとめどもなく「放」になっているが、この断面だけとらえて中国がすっかり変わったとお考えになるとすれば、かつて文化大革命のときに、これで中国は人間を心の底までつくりかえた、みんなが毛沢東に心酔し、目が輝いていて中国社会はすばらしいと言った、あの見方や報道と同じことになります。今は、その裏返しをやっているわけです。今の中国の指導者は、毛沢東時代だったら絶対に表に出てこられないような人が出ているのです。裏切者、労働者階級の敵、反革命分

子、スパイというのが、鄧小平につけられたレッテルでした。だから、彼らにとって一番必要なことは毛沢東分子を一切追放することで、そのために今やっていることは、整党のキャンペーンです。

この整党のキャンペーンは、余り新聞に出ません。解放経済のことばかり出ているが、整党は実は大変、重要なものです。今、中国共産党員は四千万人いますから、大体、二十五人に一人は中国共産党員です。その中で文革以来の入党者が、かつては三千万人ぐらいいました。最近、文革の入党者を追放しているが、まだ半分ぐらいは毛沢東語録を掲げ、毛沢東思想万歳を唱えて、各職場の実権派、鄧小平のグループを打倒した功績で党員になった人たちです。それで、八年から十年の間に鄧小平がやり遂げる仕事の一つは、毛沢東モデルを打破する非毛沢東化で、そのためにも整党を、中国社会の末端までやっている。それをやっておかなければ、自分が死んだあとどうなるかわからないという鄧小平の大きな不安がそこにあるからでもあります。三年がかりでやると言っているから、それが終わるのは一九八七年です。鄧小平氏はその辺もちゃんと計算しております。

昨年は約五、六十万人が整党の対象になりました。どういうことをやるかというと、活動経歴を全部点検して四つのクラスに分ける。つまり、非常にいい党員、党員として残していい者、過去が悪いために党員証の発行を停止する者、一番悪いのは除名、追放という四つにふるい分けて全部、点検します。それで昨年は六、七十万人の整党が終わっています。ということは、党中央レベルはほぼ終わったということです。華国鋒氏のような、党中央のトップにいた文革派、毛沢東グループは完全に追放されました。ことしは千五、六百万人、つまり中堅レベルが対象になります。それが成功すれば、来年はいよい

よあとの二千五、六百万人、最も底辺部門にいる下級幹部が対象になります。もう既に下級幹部まで対象になっているところもあります。

これらの下級幹部は、この間まで造反有理、毛沢東語録を掲げていただけに、もうしばらく待っていようとか、鄧小平が死んだらまた変わるんじゃないかとみんな考えていた。ところが、鄧小平体制が強くなってきているから、出口がなくなる。その出口のなくなった人たちが、実はハイジャックを起こしたり、この間の韓国に出てきた漁船の問題になったりする。みんな若い人たちで、文革世代です。こういう人たちが、出口がなくなったために一転して、西側から射している光を求めてやみくもにそこへ行こうとする。どうせやられるのだからというわけで、犯罪に走ってしまう。このところ中国では犯罪も多く、公開処刑もしております。中国社会では、今、そのグラス・ルーツのところで非常に大きな政治的、社会的変動が起こっている。そして、これはそう簡単なものではない。みんな自分の職場、生活がかかっているからです。人民解放軍の入れかえもなかなかできないが、その理由もそこにある。そういう中で鄧小平体制が存在しているのだから、余り早急な結論は出せないと言ってもいいと思います。

もう一つの問題は、そのような中国がこの巨大な農業国家をいかに工業化していくかという、これからの大問題です。工業化は常識的に考えても機械化だから、機械化すると省力化になる。あり余る労働力をどうするかという問題になります。こういう常識で考えると、宝山製鉄所型の設備がうまくいかないのは当然です。武漢の製鉄所でさえも、今は稼動していません。全部、稼動すると武漢市が停電してしまう。宝山製鉄所はまだ一かたまりの鉄もできていないが、この第一期工事がことしはできなければ

いけない。第二期工事はいつになるか、これまた遠い課題ですが、韓国の浦項と比べると随分時間がかかっています。そういうことをやると、上海が停電してしまうというアンバランスを持っている。しかも、あのような先進的な、全自動化された製鋼所ができると、ますます余剰労働力が出て、これをどこかに吸収しなければならなくなる。そう考えると、宝山型のものをやるよりも、もしやるのなら上海の地下鉄をどうしてやらなかったのか。やはりそれは、日本の中にあった一種の中国ブーム、フィーバーが生んだ一点豪華主義があったからだと思います。

その産業構造の転換、八億の農業人口をどうやって工業化するかというのは、そう簡単な問題ではない。都市は人でいっぱいだし、職場もそうはない。外国資本を入れていこうということになるが、これにも限度があります。合弁企業も最近はかなり進んでいるが、これもやはり限度がある。テクニカルな問題で、土地、建物は中国側が出して50・50だというのですが、その点、中国側は勘定高いから、非常に高い値段で土地、建物を評価してくるし、十五年ぐらいの期限を切っております。そうするとやはり、中国自身が資本を蓄積し、社会主義的な意味でのファンドを蓄積して、それに基づいて中国社会の近代化を徐々に図っていく道しかない、と言わざるを得ないと思います。

その場合にも人口がふえなければいいのですが、常識的に考えて、日本の三倍の面積に十倍以上の人たちがいるというのが中国の現状だと考えてください。国土は広いが、耕地面積は日本の三倍ぐらいしかない。みんなはげ山です。かつて農業は大寨に学べというので谷まで畑をつくったのですが、そういうことをすると鉄砲水になったりして土地が荒れてしまう。大寨方式はひどいということが言われてお

ります。だから、これ以上、耕作可能面積を広げることはできません。つまり、日本列島の三倍ぐらいのところに十億になんなんとする日本の十倍以上の人間が、人・人・人でひしめき合っているというのが、中国の実像です。ところが一般に日本人は、中国というと土地が広くて、悠久のロマンがあってと考えてしまう。そこにも錯覚が起こるのです。

今までのお話は中国が人口を一人もふやさないという前提のもとで成り立っているのですが、それが果たして可能かというもう一つの大問題があります。私の学生のころロベール・ギランの「六億の蟻」という本がベストセラーになっていたが、今は十億人です。建国のときには五億人でした。皆さん方の世代の中には「支那に四億の民あり」という言葉で育った方もおります。ということは、一つの同時代のうちに中国の人口が倍増しているということです。放っておけば今世紀末には二十億人になるのではないかということになる。今までのような動乱の時代で食うや食わずの生活でも、中国の人口は倍増している。これ以上、人口をふやせないから、一人っ子政策をとる。けれども一人っ子政策は、ものすごい弊害があちこちに出てきております。どうしても男の子が欲しい、妊婦が身ごもると、それを党員が来て堕胎せよと言うのだから、人権違反だという意識を芽ばえてきている。社会学者の中には、全中国が一人っ子になったときの状況を想定して、これは大変なことになると言う人もおります。だからこれは、やがてはつまずいていくだろうと思います。そうなると、中国はますます大きなツケを払っていかなければならない。これはすべて、毛沢東思想は世界を照らす、文化大革命は人類の壮挙だと言っていたのが、今度はだめ

この間まで、毛沢東政治のツケであるわけです。

だと言って急激に西側を向いても、そう簡単に問屋は卸さない。中国の人たちは一夜漬けで近代化のテキストを読めば、近代西側国家ができるかのように考えているのです。本当に日本を学ぼうというのではなく、非常にプラグマチズムな実用主義的なものです。あくまで中国が基であって、西側は手段として用いる。言ってみれば、「中体西用」ということです。清末の洋務運動のときのスローガンで、あくまで中国が基であって、西は用いるにすぎない。この言葉は「和魂洋才」に似ております。しかし和魂洋才というのは、明治の我々の先輩が本格的にヨーロッパの精神を学んだものです。中国の人たちは、汽車汽船は孔子様の乗り給わざるものなりきと言って、それをつくった近代ヨーロッパの精神、エートスは学ばなかった。彼らの学んだのは、大砲をつくる技術であり、船をつくる技術でしかなかった。すべては中国が持っているという中華思想だったからです。それは今でも変わらないのです。

日本に研修にきて企業管理のノウハウを学ぼうといっても、資本主義の最も進んだ上澄みだけをさっと導入しようとする。今までの階級闘争で、おまえは敵だ、スパイだとやってきた政治社会のコストがいっぱい残っていて、しかもすべてが鄧小平体制とは言えずに、あちこちに毛沢東型の残り火がくすぶっている。その中でこれをやろうと言っても、簡単にはいかない。日本には百年、百五十年前の江戸時代以来の町人文化があり、明治維新があった。明治維新というのは、一種の市民戦争でした。そして大正のデモクラシーから昭和の改革があり、第二次大戦の敗戦、戦後改革というコースをへて、今日の日本というものがあるわけです。ところがその間、中国は一体何をやってきたのか。確かに、大きなコストを支払う不幸な現実はありました。しかし社会主義になってからは、一時は中国共産党こそ理想だと

みんな思っていたし、中国こそ社会主義の鏡、人類の理想だと言われていたが、実際に竹のカーテンの中でやっていたことは余りにもひどいことでした。そして、この間まではえんえんと権力闘争をやっていた。それでいながら急に日本と同じようなものができるというわけにいかないし、今度、それをやるとなると、中国革命とは一体何であったのかという問題を提起されます。現に中国社会の中にも、そういう問題提起が始まっています。

一度、権力を確立した共産主義者、共産党の政権はそう簡単に変われないという問題があるから、私には、中国がこのまま西側化するとはとても思えません。その分だけ、中国は徐々にソ連との関係を改善していかなければならない。かつて私は中ソ関係の改善を強調してきたのですが、最近の中ソ関係の改善は非常に早い。やはり西側には越えられない一線があって、陳雲さんはそれを強調しています。絶対に西側の指導者には会いたがらない陳雲さんは、ソ連のアルヒーポフ第一副首相にはねんごろに応接をして、「同志、同志」と言っているのです。ここに、中国の行く方向があるのではないかというのが、私の見方です。

資本主義的な要素は、あくまでも富国強兵のための補完的な材料にする。共産党の政権とはそういうものだと思います。将来、中国のＧＮＰが二千ドル、三千ドルを超えたときには、今のような一党独裁の共産党体制はもたなくなるだろうと思う。けれども、そこまでいくにはまだかなり時間がかかる。そこまでいくには、ソ連も混合体制をやらざるを得ないし、東欧も同じであって、これはまさに社会主義の弱さのあらわれです。西側的なもので補強し、西側的なメリットを入れていかなければならないが、

だからと言って彼らは資本主義の方がいいということを、口が裂けても絶対に言えない。中国とソ連がお互いにけんかなんかしていられないというのが、これからの状況ではないかと思います。その分だけソ連との相互依存関係も高まっていく。

私は、裏側から中ソ国境を越えて二度、中国に入っています。モスクワからモンゴルまできて、ここから中国に入ったのですが、そこには非常な共通性がある。汽車や飛行機が時間どおり動かないことも一つの共通性でしょうし、エレベーターはボタンを押してもがたぴしして動かない、水道をひねっても水が出ない、何を頼んでもすぐには進捗しない、すべてを含めて共通性があるのだが、彼らにはやはりそこに安心感がある。日本やアメリカに来ている留学生はいつ亡命するかわからない。現にそれらの留学生の大半は反体制的な心情になっていると言われています。これは非常に困ったことですが、中国の政策もまずい。国費留学生としてお預かりする中国留学生に日本の文部省は十六万円出すが、そのうち十万円はこちらの在外公館が吸い上げてしまう。中国社会と平等にということで渡さないのです。東南アジアやオーストラリアから来ている留学生は、日本政府から十分なお金をもらって日本の生活をエンジョイしているのに、中華人民共和国の留学生はコンパにも出られない。だから、どうしても反体制的な「中国之春」というものに共感してしまいます。それよりもモスクワに留学生を送ればソ連に亡命する危険はないということで、最近のそちらへの留学生は三けた台になっております。

ゴルバチョフ体制になったソ連と中国は、かなり関係が改善されると思っています。例えば最近は、第二シベリア鉄道を建設し終えたソ連は、中国の大西北計画に注目しています。今、中ソの鉄道はハル

ピンから綏遠河を経てウラジオストックに抜ける鉄道、昔懐かしいマンチュリからシベリアに抜ける鉄道、張家口からウランバートルを通ってイルクーツクに抜ける中蒙鉄道の三本が走っているが、いずれも東の方を回って行くことになります。それよりも新疆ウィグル自治区を貫いて直接、西シベリアに出れば、ソ連あるいはヨーロッパとの距離も大変短かくなる。中国はそれを大西北計画と言っているが、このプロジェクトにソ連が参与する可能性が非常に高くなってきています。アルピーホフが深圳に行って「これはいい」と言ったが、西側から技術や資本を導入してシベリア開発をすることについて、ソ連は何も異論はない。むしろ西側がそっぽを向いていかないだけで、できればそれをしたいわけです。

アムール河のソ連側にブラゴエチェンスクというところがあり、その対岸に黒河というところがあります。今、中国に「南に深圳、北に黒河」という言葉があります。それは、余りにも西側に傾斜しすぎるひずみを直すという意味がある。当面、毛沢東モデルを壊すために深圳は必要だったが、批判もあるだけに、バランスをとる意味でもソ連に窓口をあけておこうということです。私は、中ソ関係が順調に推移すれば、シベリア開発に中国の労働力が参ずることがあり得るかもしれないと思っております。中ソ関係は、国家と国家の関係は完全にノーマライズされているから、次は中国共産党とソ連共産党との関係でしょう。日本共産党との関係改善も話題にのぼってきております。そういうかたちで、社会主義同士の相互依存関係をもう一度、中国自身が見ていくことになるのではないでしょうか。毛沢東モデルという極端な社会主義モデルの打倒が必要であったために、異質な西側との接近が必要であったかもしれないし、解放経済体制が必要であったかもしれないが、そろそろ抑制がかかってきています。

以上のようなことを申し上げると、中国の実像がだんだん見えてくるような気がします。そして中国は、日本から物を買うにもだんだん違ってくる。今、ホンダのオートバイが売れており、私もオートバイは売れるだろうと『週刊ダイヤモンド』に書いたばかりで、そのとおりだと思いますが、売れるものは業種を選別しなければならなくなる。何でもそれ行け中国というわけにはいきません。外貨も、中国はこのところ無理して貯めて百七十億ドルぐらいになっている。そこから三十億ドルぐらい減っているようですが、十億の人口を持つ巨大な国家としては、百数十億ドルの外貨ではどうしようもない。最近は日中貿易もかなり大きくなったが、もう中国は赤字基調です。しかも、この外貨の貯め方も、ものすごい無理をして貯めている。すべてに二重価格をとっている。日本人に売る値段と中国人に売る値段とは違っています。

観光旅行でさえも三つのレベルがあって、〝日本人と見たら外貨と思え〟ということで日本人には一番高い。その次は華僑です。アフリカなど第三世界から来る人は非常に安い。日本人は金持に見られているから、とにかく高い。北京にいいホテルができているが、ものすごく高い。しかも日本人にとって今の中国は、日本の経済の強さのために、高いと言っても大したことはない。三百香港ドル取られても日本のタクシーに比べればはるかに安いと思いますが、彼らにとって三百香港ドルは、一ヵ月働いてもとてもじゃないお金です。それを日本人はタクシー代として払いますが、中国人から見れば大変なことです。それに対する彼らの反発もあると思う。これじゃまるで租界ではないかということです。きれいなホテル、友誼商店（ドルショップ）には、日本人は入れるし、中国人の幹部も入れます。けれども、

一般の中国人は入れない。そういう社会ができていることに対する不満もある。そういうところで高く取っています。

私が個人で中国に行ったときに、東京・北京間の飛行機運賃は十何万円ですが、あと自分でホテルに泊まり、実に安い中国旅行ができました。一週間、二週間いても、中国の安いものを食べていれば、本当に何でもない。ところが、二週間ぐらいの普通の中国旅行だったら大体五十万円ぐらい取られてしまう。日本の旅行社が儲けているのではなくて、全部、中国が外貨を獲得するようになっているからです。それから、駐在員事務所の土地、建物が合弁資本でも高い。中国の辺鄙なところでも、銀座なみとは言わないまでも、東南アジアで香港を除けば一番高いぐらいの値段を出してくる。私の教え子で北京に駐在しているのが何人かいるが、厨房設備なしの普通の部屋で一日六十元です。これは中国人の一ヵ月分の給料です。支店長クラスだと、厨房設備のある二部屋で一日三百元です。日本の企業からすれば、仮に駐在員事務所の住宅に百万円出しても、将来のためと思って我慢しているし、お金もあると思いますが、これは余りにも高い。そういうふうに二重価格になっている。

東京で幾らアメリカ人にと言っても、日本人の三十倍もするような家賃で貸すという非常識なことはしない。しかし、みんな中国だから許しているのです。中国に対しては過保護で、はれものにさわるように大事にしている。また中国は、そういう状況の中で甘えの構造に乗っかっている。それで外貨がたまっているのであって、ノーマルな経済のところにもどしていったら、中国の経済は、そんなわけにはいきません。深圳経済特区に行くと、香港ドルの方が強い。いかに深圳に典型をつくって将来の香港回

収に備えると言っても、深圳は、そういうところでさえもどんどん香港化されている。完全に香港の影響を受けています。料金を人民元で払おうとしても、向こうはそっぽを向いて、香港ドルが欲しいと言います。

では、その香港ドルはそんなに強い通貨だろうか。これはやはりローカルカレンシーです。香港の人たちは、お金を貯めて香港ドルで貯金するでしょうか。かつてはポンドとドル、最近はドルと円です。つまり香港の人たち自身、お札は大きいが、だれも信用していない変動の大きいお金です。香港上海銀行自体がみんなドルにして貯金し、アメリカに持っていっている。また香港は世界の三大金融センター、アジア最大のオフィシャルバンキングセンターですが、あそこで取引されている為替の大部分は、香港ドルではない。米ドルであり、円であり、ポンドである。その弱い香港ドルでさえも深圳に行けば宝のようなものになります。そして深圳は中国大陸全体から見れば非常に進んだところだということになると、やはり中国という世界は、これまでの毛沢東型政治のツケをここ当分、二十一世紀に至るまで払っていかなければならない。中国の人たちにとって大変、気の毒なことかもしれないが、これは結局、やむを得ないことだと私はみなしております。きょうは、ざっくばらんな見方をご披露させていただきました。長い間、ご清聴ありがとうございました。

——了——